

2014年度学院留学 研究成果概要

種 別：学院留学（長期／短期）
所属・職・氏名：社会学部・准教授・鳥羽 美鈴
研究課題：南米諸国の少数言語とスペイン語化に関わる実態調査
留学期間：2014年4月2日～2014年9月16日
留学先：ペルー・リマ
リマ大学

研究成果概要（日本文（全角）の場合は3,000字（A4、2ページ）程度）

留学先として選択したペルーは、南米諸国のなかでも先住民の割合が高いと同時に、多くの国民が母語とし公用語となっているスペイン語とは言語学的にも大きく異なる少数言語の使用話者が多い国である。その言語には、ケチュア語、アイマラ語、アマゾン地域で使われる諸言語などが挙げられるが、本調査では特にケチュア語話者に焦点を当てて研究を進めた。

ペルーではインターネットを利用して手軽に書籍を購入できる環境にはなかったため、リマ大学の受入れ教員の助言をもとに書店や古本屋を複数まわって、ペルーの言語政策や民族問題、ひいては社会問題やペルーの歴史に関わるスペイン語の書籍の収集に努めた。

また、資料の収集・分析と並行して、聞き取り調査を実施した。当初は、少数言語話者が集住する農村地域への訪問も予定していたが、時間的制約から首都リマ市内に出稼ぎに来ている人々への聞き取りに終始した。彼らの多くは少数言語を母語とし、家庭ではこの言語を用いているが、ペルーにあって生活の糧を得るうえで必要不可欠なスペイン語の運用能力も有しているという点で、少数言語のみの運用能力しか有していない農村地域に残る多くの人々とは状況を異にしている。報告者の観察の限りでは、リマ市内において、彼らが少数言語を使用したり、その運用能力を有していることを明示したりするといった場面はほとんど見られなかった。そのため、聞き取り対象者を探しだすまでには予定以上の時間を費やすこととなった。

今回の短期滞在の間に、南米の他国、特にアイマラ語話者の多いボリビアへの渡航と、そこでの2言語教育の現場の観察と教育関係者や生徒への聞き取り調査を予定していたが、この度は残念ながら実現しなかった。南米諸国の少数言語という大枠で状況を捉えるには、ケチュア語という一言語、またペルーという一国内のそれも首都圏内における調査のみでは不十分であり、今後、引き続き、リマ市外や南米他国での少数言語話者の状況を調査したいと考えている。

この度の研究調査から明らかになったのは次のような点である。

第一に、教育省が発行する言語政策に関わる文献はあるものの、少数言語やケチュア語話者を題目とした文献は報告者の調査の限りでは、ほとんど見当たらないことである。その理由は、ケチュア語話者を含むペルーの少数言語話者の問題が、言語問題としてではなく、民族や農村地域の問題と見なされていることにある。従って、農村出身者のカテゴリーに、ケチュア語話者が多く含まれていることがあり、今後研究を進めていくうえで、カテゴリーの定義の再考の必要性を見いだした。

第二に、ケチュア語を習得するための書籍は出版されているが、この言語を積極的に習得しようというペルー国民や学生の数は極めて限られているのに対して、ケチュア語の母語話者はスペイン語の習得に努めており、ペルーにおいて明らかにスペイン語化が進行しつつあることである。農村地域の初等教育レベルにおいては少数言語も使用されるが、スペイン語化の動きを政府の教育政策は後押ししている。

第三に、日本などの先進国では目立たない識字率の問題は、ペルーの農村地域では依然として解決すべき重要課題となっていることである。従って、少数言語またはスペイン語の運用能力を有するとみられる話者において、その言語の筆記・読解能力をも総合的に確認する必要性があることが分かった。

第四に、少数言語話者の言語観についてであるが、報告者が主にフランス語圏アフリカ諸国を対象としてこれまでに実施した研究調査の結果との類似点を見出した。それは先にも触れたように、少数言語話者がその言語の運用能力を表立って示したり、スペイン語との2言語話者が、英語とスペイン語の2言語話者のようにこれを積極的に評価したりすることはないという傾向においてである。また多くの少数言語話者において、母語を維持したいという意識よりも、社会経済的昇進を図るためにスペイン語を習得したいという意識が強くみられた。

報告者は、長期的にはフランス語圏とスペイン語圏のとりわけ「第三世界」と括られる地域間における言語状況の比較研究を実現させることを目指しているが、以上の南米諸国の一国で実施した少数言語とスペイン語に関わる実態調査は、その足掛かりとなるものである。

以上

研究成果概要のデータは、gakunai@kwansei.ac.jpまで提出してください。